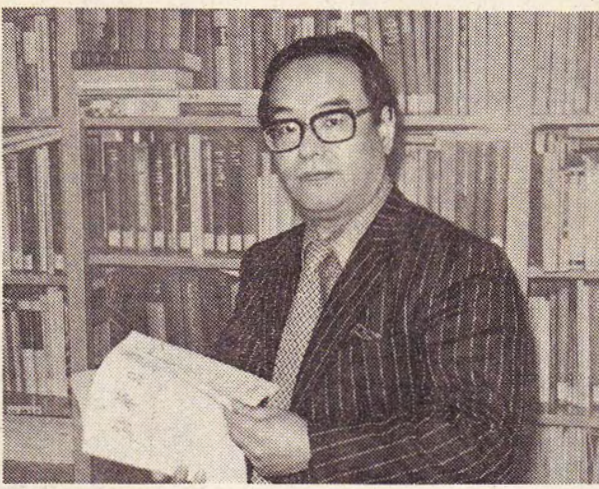


東京外語大教授中嶋嶺雄 会、歴史などを踏まえた上で「松本市」は、気鋭の評論家として、また現代中国を中心に国際関係論研究者として目覚ましい活躍をしている。中嶋は、「国際関係論」というのは、外交、社



# とうきょう最前線



中嶋嶺雄・東京外大教授

〈36〉

権を得た学問です」と自ら認める。「僕のやっている中国研究も、以前は社会科学としてより、印象やイデオロギ―上での主張でしかなかった。これから対中国関係で起ころおは広い国際的視野で中国を見なければ」とも。

少年時代、松本で有名なハイオリニスト豊田耕児と共に音楽を学んだ中嶋は、高校一年のとき家庭の事情があつて、社会に対する不満や批判をはらんだ青年期を経て、時

いと思う」と、現代政治のホットな部分にかかわる研究者としての姿勢を強調した。早稲田大学教授依田憲(よし)「家五」北佐久浅科「し」日本近代史の研究者だが、「近代日本の重要事件は、対中国関係で起ころおは大切」というのが持論。そこで、日中関係史に焦点を

代になって中国は日本に学ぼうとしたが、それは日本の急速な西欧化を学ぼうということだった。いまは、歴史、文学、経済、総合的に日本そのものを学ぼうとしています。その語す依田の研究室で会った留学生、上海・復旦大学歴史学部の孫志助手は、日本の候(そうろう)文、まですを学ぼうとしていた。戦時中、旧制の中学生だった上智大教授三輪公忠(こうちゅう)「

アメリカのジョージタウン大学へ留学し、英語でアメリカ史を学び、アメリカで日本近代史を習う。羽目になって、今上智大国際関係研究所に籍を置く。「留学から帰って、大学の外国語学部でアメリカ史を英語でアメリカ流に教えた。これが評判悪くてね。これに日本史をからめてやれば興味あるだろう」とはしめたのが日米関係史」と、笑いながら語

## 中国「広い視野で

### 学 界 (上)

⑤

の流れへの目を養った。語学、社会科学的方法論、フィールドワーク、資料収集、ブラス行動が中嶋の学問的態度。中嶋は「学者が権力に近づくと、そこには、禁欲がなければならない。でも、権力に接近すること自体が罪悪」という考え方は間違つて

つとめている。依田は、すでに二十回以上中国を訪れ、その経験から、いまの中国には歴史が始まって以来、はじめて、日本そのものを「知る」という気風が出ていることを喜んでいる。「日本には永い間、中国に学んできた歴史があります。近

ラストレーションがあり、アメリカ人自身が反米になりかけている」といふ。そうした事情が日米両国のかかりに与える影響に注目している。近・現代史を国と国のレベルでとらえる一方、個人、大衆レベルでもとらえようとするのが明治大学助教授後藤藤一郎(ふじ)「下」伊那南信濃村。後藤が郷里で開いている私塾形式の遠山常民大学は、開講して五年目を迎える。こ



三輪公忠・上智大教授

す。三輪は今、「(西側世界に対して)アメリカがオールド・マイティーでなくなったことに、アメリカ人自身の問題がある。後藤がいま狙いをつけているのは、伊那谷の近代思想史の変転。勤王・国学の地に社会主義運動が起り、同じ土地に戦前、全国に先がけて国民精神作興会がつくられるというように、庶民の思想の振幅が大きい。そこには、上から強制されただけでなく、「下から支えたファシズム」があったはず、と後藤はみているからだ。(文中敬称略)